

東京大学史史料室ニュース

第33号 2004・11・30

目次

- 「努力立身の人」ヘンリー・ダイアー2
 個別大学史から「戦後大学改革」をみる5
 「東大総長のプレゼンス 渡邊洪基から内田祥三まで」展報告7
 史料室日誌抄録8

「努力立身の人」ヘンリー・ダイアー



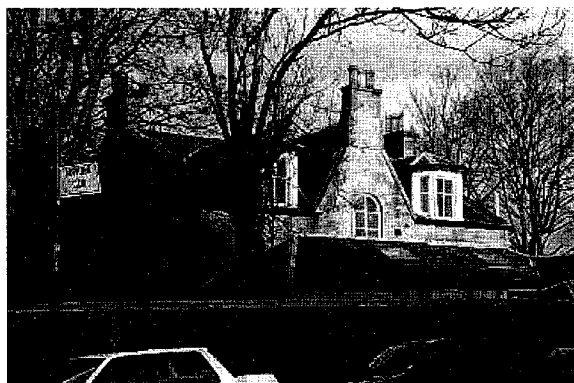
ダイアーが学んだウィルソン学校（シヨッツ鉄工所付設）

[Peter McCue氏提供]

Household	Name	Age	Sex	Occupation	Value	Notes
1	Henry Dyer	21	M	Student	0	
1	John Dyer	20	M	Student	0	
1	William Dyer	18	M	Student	0	
1	Elizabeth Dyer	17	F	Student	0	
1	James Dyer	15	M	Student	0	
1	Thomas Dyer	14	M	Student	0	
1	Richard Dyer	13	M	Student	0	
1	Robert Dyer	12	M	Student	0	
1	John Dyer	11	M	Student	0	
1	William Dyer	10	M	Student	0	
1	Thomas Dyer	9	M	Student	0	
1	Richard Dyer	8	M	Student	0	
1	Robert Dyer	7	M	Student	0	
1	John Dyer	6	M	Student	0	
1	William Dyer	5	M	Student	0	
1	Thomas Dyer	4	M	Student	0	
1	Richard Dyer	3	M	Student	0	
1	Robert Dyer	2	M	Student	0	
1	John Dyer	1	M	Student	0	

「1851年国勢調査」におけるダイアー家の記録

[Robin Hunter氏提供]



レンジのダイアー宅

1. 「鍛冶屋の子」

「教頭ヘンリー・ダイヤー氏は鍛冶屋の子より努力立身の人と聞く。」

工部大学校（東京大学大学院工学研究科の前身）の学生のあいだでは、こんな話が広まっていた。立身できたのも、「学校の成績も良くウィットウォルス給費生に選ばれた」ことによる、ということも知れわたっていた。『旧工部大学校史料附録』（虎乃門会、1931）には、そんな回想記が収められている。

ウィットウォルス給費生とは、精密工作機械の発明家 J. ホイットワース（Joseph Whitworth）が創設したもので、「エンジニアリングの理論と実践にすぐれた者」に一人あたり年間100ポンドの奨学金が与えられた。H. ダイアー（Henry Dyer, 1848-1918）はグラスゴウ大学生であった1870年にスコットランドで最初の給費生に選ばれ、3年間奨学金をもらうことができたのである。

ダイアーは、そのほかにも輝かしい学業成績を残している。たとえば、1872年度には初級物理学奨励賞とでもいえるアーノット賞に輝き、15ポンドを支給されている。工学・造船学でウォーカー賞、天文学でワット賞などを受賞した記録もある。

ダイアーがスコットランドから日本政府のお雇い教師として招かれ、工部大学校およびその前身の工学寮に在任していたのは、明治6（1873）年から16（1883）年までであった。このころといえば、S. スマイルズ著 *Self Help*（1859）が『西国立志編』（明治4）と題して訳出され、青年を鼓舞していたころであった。志を立て倦まずたゆまず努力することが立身出世につながることを説いた、この本が大ベストセラーとなったころであっただけに、ダイアーも立志伝中の人物として崇められていたのであろう。学生にはそう映ったにちがいない。

2. 『国勢調査』のなかのダイアー

(1)

ダイアーは、はたして「鍛冶屋の子」であったのか。

『国勢調査（Census）』などによれば、たしかに父は「鑄造場の労働者（foundry labourer）」、祖父は鉄工所の「溶鉱炉番（furnace keeper）」であった。働き口を求めて、何回か住所を変わっている。「ヘンリー・ダイアー家の出は低く、ダイアー自身の家柄は裕福な家でも名家でもなかった」ようである。

もう少し詳しくみると、父ジョン（1823-1891）はアイルランドの出身。コーク州の生まれである。1841年『国勢調査』によると、住所はアイルランド東部のキャンパスネサンのウィショーというところであった。家族は9名で、両親と長男であるジョン（当時18歳）以下7名の子どもという構成である。

それが、1851年『国勢調査』の記録になると、住まいはスコットランドのグラスゴウに変わっている。アイルランドから移住してきたのである。おそらく働き口とよい暮らしを求めての移住であったにちがいない。

このとき、父ジョンは29歳。「鑄造場の労働者」で、住まいはラナークシャのボスウェル区ミュアマドキン

村（現在はベルシル町に併合）エディンバラ通り32番地にあった。地元ボスウェルの農夫兼配達人ロバート・モートンの娘マーガレットと出会い、1848年に結婚。二人の長男がヘンリー・ダイアーであり、同年8月16日の生まれである。つづいて長女ジャネット、次男ロバートが誕生した。

グラスゴウ市郊外にあるこのミュアマドキンこそ、ヘンリー・ダイアーの出生地である。グラスゴウから南東へ12キロ。クライド川に面したこの村は、1830年代に鉄と石炭が発見されたことで関連の産業がおり、にわか景気にわきたった。ここには、英国各地から大勢の労働者が移住してきた。ダイアーの父もそうした一人であったのであろう。

そのご、一時ホリータウン（Holytown）に移るが、1857年ころ、ショッツ（Shotts）という、グラスゴウの南東にある町に転居した。キャンパスネサン区ステイン村スプリングヒル（現在はショッツ市ステイン町スプリングヒル）135番地という住所である。近くで石炭と鉄鉱石が採掘され、ショッツ鉄工所が1802年に開業したことで発展した町である。「ダイアーの父はその景気のいい大きなショッツ鉄工所で働いた」もようである。「工場長だった」という縁者がいるけれども、どんな仕事をしていたのかよくわかっていない。

この時期、ダイアーは、ショッツ鉄工所に付設されたウィルソン学校（Wilson's Endowed School）に学んだ。成績が抜群であったことから、系列の会社に勤め口が与えられることになる。

1861年『国勢調査』では、住所は同じスプリングヒル135番地にあった。ダイアーは12歳、「学生」とあるが、やがて徒弟修業に入ることになる。グラスゴウ市内克蘭ストンヒルにある、ジェームズ・エイトキン社という鑄物工場である。同社での徒弟修業を機に、ダイアー一家はグラスゴウに転居する。

1871年の『国勢調査』になると、住所はグラスゴウ市セント・ヴィンセント通り449番地に移っている。セントラル駅西方の、クライド川右岸に広がる造船所地帯の北側にあたる。ダイアーはこの家からグラスゴウ大学に通っており、入学した1868年から毎年この住所を大学に届けている。

1873（明治6）年になると、日本政府に招へいされ来日することになるが、ダイアー不在中の父母の住所はグラスゴウ市ダンパートン通り128番地であった。グラスゴウ大学近くの、ケルビングロブ地区の西端にあたる。1881年『国勢調査』では、父ジョン（58歳）は退職しており、母マーガレット（58歳）と下女（20歳）の3名で暮らしている。

(2)

日本から帰国後はどうかというと、ダイアーは、まづレンジ（Lenzie）というところに居を構えた。グラスゴウ市内から北東へ12キロほどにあり、1842年のエディンバラ・グラスゴウ鉄道の開通にともない開けた町である。鉄道会社がレンジ駅近くにグラスゴウへの通勤者用の住宅を建て、住民には無料の定期券を支給した。しかも、1870年代に水道施設が完備されたことで、通勤者用住宅地として一段と発展することに

なる。ダイアーもここに家を求めたのである。

その家は、レンジィ駅の南側の、林に囲まれた広々とした屋敷のなかに今も残っている。半円形の窓、クラシックスタイルの家である（別掲写真参照）。同型の家が並んでおり、確かにここは郊外住宅として建てられたと思われる。ここに、日本滞在中に授かった三男一女と、それにおそらく両親も一緒に、過ごした。

それから今度は、グラスゴウ市内ハイパラテラス8番地に移った。グラスゴウ大学のすぐ西北。現在のハイバラロード52番地にあたる。ここがついのすみかとなる。屋根裏部屋と半地下つきの二階建のタウン・ハウスで、裏には古木の茂った庭園があった。1891年『国勢調査』によると、ダイアー夫妻と4人の子ども、ダイアーの両親、それに下男下女2名の、総勢10名という大家族であった。

田辺朔郎（1861-1944）や曾禰達蔵（1852-1937）ら工部大学校の卒業生、あるいは岩崎久弥（1865-1955）ら日本産業の指導者が訪問したのは、ハイパラテラス8番地にあったこのタウン・ハウスであった。日本での体験を生かしてグラスゴウの教育改革を推進したほか、日本研究、日本人グラスゴウ留学生の支援、日本政府の帝国財政及工業通信員などにみられる、日英交流の推進者としての活動は、ここを拠点に展開されたのであった。

3. 徒弟修業

ダイアーはグラスゴウ大学の出身だが、徒弟修業をした体験の持ち主でもあった。大学で自然科学を専攻しただけでなく、徒弟となって実地の体験をしたということは注目される。工部大学校の都検（教頭）として、理論と実習をむすびあわせたサンドイッチ・コースという特色ある教育課程を構想し具体化したのも、そのような経歴と関係があるように思われる。

実際の現場とのかかわりは、すでに少年のころにはじまっていた。まず、前記のように、ショッツに居住し、父が働くショッツ鉄工所に付設されたウィルソン学校（写真参照）に学んだ。当時の教師R. マクナブ（Robert M'Nab）のいうには、ダイアーは

「並々ならぬ忍耐力と勤勉さをみせました。しかも、すばらしい記憶力と最高級の天賦の才能とをあわせ持っていましたので、それぞれの学級で第一位を占めることができたし、毎年おこなわれる試験ではすべて一等賞を獲得しました。

学校から選ばれてショッツ鉄工所系列の事務所に入り、そこに数年間務めました。同事務所では、計算の知識を生かして実際に仕事をしたことで、学校の演習だけでは習得することができないような正確な計算力を身につけることができました。

一家がグラスゴウに転居してからすぐ、同市で最大の会社の一つで応用工学の知識を習得しました。」

グラスゴウで「最大の会社」というのは、ジェイムズ・エイトキン社という鋳物工場であって、ダイアーは1863年、15歳のころ、同社の徒弟に入っている。ダイアーを指導したのは同社工場長のA. C. カーク（Alexander C. Kirk）であって、かれはダイアーを高く評価していた。

「ダイアー氏にはすぐれた能力と知性がみられたので、機械組立Iむけに鋳物などで作った製品の図面を描くのにしばしばかれを使いました。終わりころには製図室で働いてもらいましたが、かれは勤勉か

つ集中力がありましたので、急速な上達をみせました。堅実さ、辛抱強さ、工学の研究能力、職工としての資質を高く評価するものであります。」

「謹厳で、堅実で、注意深い」人柄であるうえに、「職工として腕が立ち、学究的であったので、前途はおおいに有望である」とも称えている。

職工長のT. ケネディ（Thomas Kennedy）も、同じようにダイアーを称賛し、

「徒弟修業の最後の年は、わたしの助手として働かせ、設計をさせたり、組立工と機械工に進む仕事をさせていました。優れた知性と能力があったので、ほかの徒弟よりも高額の給料を支給されました。」と述べている。「おこないは実に模範的でありました。腕がよくて、まじめで、堅実で、勤勉な職工でありました」という評価も残している。

4. アンダソン・カレッジの夜間学級

ジェイムズ・エイトキン社で徒弟修業中に夜学に通っていた、ということも特筆される。アンダソン・カレッジの夜間学級であって、グラスゴウ市庁舎のすぐ北側にあった。1796年の開校以来、働きながら学ぶ意欲をもった人たちの学習拠点として、伝統と実績のある学校であり、現在はストラスクライド大学になっている。

このアンダソン・カレッジに、ダイアーは少年のころから強い関心をもっていた。そもそもはミュアマトキン村にいたころに、地元の牧師から同カレッジ出身者の出世話を聞く機会があって、強い感銘をうけたのだった。科学者T. グラハム（Thomas Graham）、探検家D. リビングストーン（David Livingstone）、石油業の創始者J. ヤング（James Young）の三名についての話である。はじめてグラスゴウに出かけたときなど、ダイアーは真っ先にジョージ通りにあった同校にむかい、その博物館を見学してきたのだった。「それから数年後、徒弟修業を完成するためにグラスゴウに移ったとき、はじめてこの夜間学級に出席する機会をえた」。将来を見すえて、堅い決意で通ったにちがいない。

もっとも、そのころ同校は、初等数学のほかに、化学、自然哲学、天文学、生理学、植物学の「大衆むけ講義」が開かれていたが、「工業や産業全般に対する応用については、この夜間学級ではまったくとりあげられなかった」と、ダイアーは伝えている。

徒弟期間が満了すると、今度はいよいよグラスゴウ大学に進んだ。1451年創立という歴史の古い大学だが、教養主義から実学重視の大学に変容し、1840年にはどこよりも早く土木・機械学講座を開設していた。1870年の秋には、ハイストリートの旧キャンパスから現在のギルモアヒルに移転した。このグラスゴウ大学に5年間通ったが、その間にも「夏期には作業場や設計事務所でも働いたし、時々アンダソン・カレッジの夜間学級に出て補足の学習もした」。理論学習だけでなく、ひきつづき実習体験を重視していたのである。

アンダソン・カレッジは、その夜間学級に通ったということのほかに、もう一つ、ダイアーにとって重要なかわりがある。幕末に英国へ密航した日本人留学生の一人で、のちに工部省の要職をしめる山尾庸三（1837-1917）と同窓であったという点である。ダイアーは自著『大日本』（平野勇夫訳、実業之日本社、1904）で、つぎのように回想している。

「私にとってうれしい驚きだったのは、伊藤博文氏の後任として工部大輔を務めていた山尾庸三氏は、実はかつてグラスゴウのアンダーソン・カレッジ……の夜間クラスで見かけたことのある人物だったということである。当時の山尾氏は、グラスゴウのネイピア造船所で造船技術を実地に学んでいた。山尾氏がグラスゴウに滞在中、私はとくに個人的なつきあいがあったわけではないが、同じ時期にともにグラスゴウで暮らしていたということだけで、私たちはおおいに意気投合したものである。

……私の提案した技術者養成計画に山尾氏は心から賛意を表してくれ、何事につけみずから進んで可能な限りの親切な配慮を惜しまなかった。のちに『工部大学校』と呼ばれるようになる工学寮カレッジ（工学校）が成功を取めたのは、ほかならぬ山尾氏の努力に負うところがまことに大きい。」

アンダーソン・カレッジの同窓生・山尾の支援をうることができたことで、工部大学校が「成功を取めた」というのである。

5. グラスゴウ大学ホイトワース奨学生

(1)

ダイアーがグラスゴウ大学に入学したのは1868年の夏のことであった。同年度の『グラスゴウ大学学生名簿 (Glasgow University Album)』には、ヘンリー・ダイアー20歳、出生地ラナークシャ、父の名前はジョン、職業はエンジニアと書き入れている。以後、卒業する1872年度まではほぼ変わりがなく、父の職業欄には「エンジニア」と届けている。

この1872年、工学を専攻する学生に学位取得の道がはじめて開かれることになり、ダイアーはグラスゴウ大学で最初の理学士号取得者の一人となった。

在学中の成績はすばらしく、ホイトワース奨学生に選ばれたほか、かずかずの褒賞に輝いている。毎年刊行される『グラスゴウ大学受講記録一覧 (Class Catalogue)』には、受賞記録が受講科目とともに記されている。ちなみに、1年次の1868年度には自然哲学、数学（上級）、2年次（1869年度）は土木工学・機械学、3年次（1870年度）は土木工学・機械学、4年次（1871年度）は実験物理学、自然哲学の、それぞれのクラスで優秀賞 (Class Prize) を受賞した。5年次（1872年度）には、『18世紀における科学の進歩に対するニュートン原理の影響』という論文で最優秀論文賞 (ワット賞) を受賞している。

在学中の実績については、ダイアー自身がまとめた記録がある。『推薦書と成績証明書一覧』とでも称するわずか16頁の小冊子であって、下記のような題名から、工部大学校の都検（教頭）職に応募するさいに作成したと思われる。

Selections from Testimonials presented by Henry Dyer, C. E., On the occasion of His Appointment as Principal of the Imperial College of Engineering, Tokio, Japan. February, 1873.

この小冊子は、三好信浩『ダイアーの日本』（福村出版、1989）などですでに紹介されているように、グラスゴウ大学の「工学資格証明書」と「学位ならびに褒賞一覧」、それに恩師のランキン (W. J. M. Rankine) 教授や、先に紹介した徒弟時代の指導者T. ケネディなどから寄せられた推薦書ないし証明書が収められている。

これによると、ダイアーは、工学資格証明書取得要件である、数学、自然哲学、無機化学、地質・鉱物学、土木・機械学を受講し試験に合格したし、製図技術についても認定を受けた。また、グラスゴウ大学文学修士号および理学士号、工学資格証明書、さらにはホイトワース給費生、ホイトワース奨学生、アーノット賞（自然哲学）、ウォーカー賞（工学・造船学）、ワット賞（天文学）、トムソン奨学生（実験科学）、ウィリアム・トムソン卿高等数学クラス一等賞といった学位と褒賞の記録も掲げられている。

ダイアーは徒弟となって実際に修業したうえで、グラスゴウ大学で自然科学を専攻して学士号を取得したという経歴の持ち主であった。しかも、徒弟修業においても学業においても成績は優秀であり、性格・才能・学識も高い評価をうけていたのである。そんなダイアーをランキン教授は工部大学校の都検職として推薦したのであった。学問と実務の両方に秀でていたのだから、まさに日本が求めていた人材であったといっていいてあろう。

(2)

ホイトワース奨学生に選ばれたことは、ダイアーにとって大きな誇りであった。奨学金を管理する英国政府の科学技芸局書記官あてに、1870年10月1日付で作成した計画書を、決定通知書とともに、前出の『推薦書と成績証明書一覧』に収録している。それは、ランキン教授と相談してまとめた「ホイトワース奨学金を受給する3年間の履修計画」であって、下記のように、幅の広い学習を志向していたことがうかがわれる。

「技師および製図工として7年間ほどの実習体験がありますので、今後3年間は、そのほとんどを一般教育を修了し、もっぱら理論的学習にあてるつもりであります。

工学資格証明書の取得に必修であるグラスゴウ大学工学課程を修了するとともに、文学修士号を取得できる授業を履修するつもりであります。

教養課程では、古典および哲学には学位取得に必要な時間をあてるだけにして、工学、数学、自然哲学の履修にできるだけ時間を充てたいと思います。

このようにして、十分な一般教育を受けるつもりです。それから、ラテン語を履修したあと、重要な手段となる現代語を急いで履修することができると思います。

教養課程を修めたあとは、資格試験で古典および哲学の知識を必要とする学位の取得へむけて進むつもりでありますし、また、英国学士院の造船学修了証書の取得をめざして挑戦するつもりであります。」

ここには、エンジニアという専門職は専門分野の学力と実務能力だけでは十分でなく、広い教養教育もさらに必要であるというダイアーの教育観が、すでにあらわれているように思われる。

工部大学校という工学専門教育機関では、士族出身の学生が多く、ともすれば実務を軽視する傾向がみられたし、専門職はとかく思想や行動の偏狭さに陥りがちであるだけに、この教養教育の観点は大きな意味をもつ。工部大学校の都検のときも、また帰国してからも、ダイアーは機会をとらえて「エンジニアに教養教育が必要である」と主張し、「専門職の教養化」を説いたことは、三好信浩『ダイアーの日本』などに詳しい。

(名古屋大学教育学部)

個別大学史から「戦後大学改革」をみる

岡田 大士

はじめに

2004年4月の法人化以来、国立大学は1949年に新制大学として以来の大きな転換期を迎えている。この転換期においてこそ、現在の日本の高等教育体制を規定した「戦後大学改革」を再検討する必要がある。本稿では、日頃東京工業大学の大学改革資料を扱っている一人として、個別大学の大学史から「戦後大学改革」の研究を行う意義について論じてみたい。

1. 「戦後大学改革」

占領下の日本の高等教育機関では、まず、軍から派遣されたり極端な軍国主義を唱えた教員は辞職や追放によって大学から離れ、戦時中追放された教員が復職した。また、軍事研究に関わる研究所や学科は廃止・改組された。1946年3月には米国対日教育使節団が来日し、それに対応する日本側の団体として教育刷新委員会が設置される。教育刷新委員会は、初等中等教育の改革を進め「6・3・3制」という新学制を答申し、さらに中等教育に続く「4年制」の新制大学構想を1947年初頭に示した。そして1947年7月に発足した大学基準協会が定めた大学基準に従い、新制大学は1949年（一部1948年）に誕生した。新制大学設置にあたっては「一府県一大学」の原則のもとに高等教育機関の統合・旧制大学への高等学校・専門学校・師範学校等の包摂が行われた。カリキュラムには人文・自然・社会の3分野から3科目ずつを受講させる「一般教育」が組み込まれた。戦後の新制大学発足に至る一連の改革は、一般に「戦後大学改革」と呼ばれている。

2. 「戦後大学改革」の研究動向

こうした、「戦後大学改革」を対象にした歴史研究の動向を1960年代から振り返ってみたい。1960年代の研究は、1957年に刊行された戦後大学改革に関するいわば正史としての『大学基準協会十年史』を中心に、実際に改革に関わった当事者の著作物などを用いて研究が進められた。この時期には、「戦後日本の教育改革」第9巻『大学教育』に代表されるように、寺崎昌男らによる研究が活発に行われたものの、『十年史』以外には扱える資料に限りがあった。しかし、1969年に大学史研究の全国的な組織として中山茂と横尾壮英らによって「大学史研究会」が設置され、さらに1974年に『東京大学百年史』編集委員会が設置されると、大学史研究は「実証的歴史研究のディシプリンを取り入れ、学術的研究の所産としての性格を強め」るようになった。この1970年代の変化と前後するように、1980年代以降、占領軍文書や日本の大学関係者の資料

が公開されはじめた。この1980年代の資料状況の変化は、戦後大学改革における占領軍および日本政府の対応を明らかにした。さらに1990年代以降、各大学で新制大学50年を控えて沿革史作成が活発に行われた。東京大学史史料室をはじめとした各大学のアーカイブズ施設においては歴史的資料の集積がすすみ、研究紀要の刊行も行われている。

3. 東京帝国大学「教育制度研究委員会記録」の発見と米国教育使節団への影響

これらの1980年代の新資料を用いた「戦後大学改革」史と個別大学史を結びつける重要な契機となったのは、東京帝国大学「教育制度研究委員会記録」の発見であったと筆者は考える。「教育制度研究委員会」は「日本教育家の委員会での審議と並行して、さらに米国教育使節団を迎えるために、大学としての教育改革意見をまとめておく必要」から当時の東大総長南原繁により設置されたものである。この委員会の公的な記録は残されていなかったが、海後宗臣（当時文学部助教授）による手書きのメモが発見され、1987年『東京大学史紀要』に公開された。この委員会では、当時専門学校、高等学校、師範学校、女学校など、複数に分かれていた中等教育・高等教育の課程を一本化し、大学を4年制とする案が議論されていた。そして、1980年代の米国教育使節団に関する研究成果を通じて、この答申案が、1) 一旦南原総長によって媒介されつつ米国教育使節団に伝えられた経緯があり、2) しかも伝えられた意見の基底に「教育制度研究委員会」で整理された、戦前日本の教育改革意見が含まれていた、ということが注目され、この委員会で交換された意見が「日本教育家の委員会」を通して米国教育使節団に影響を与えただけでなく、南原個人を通ずるルートでも影響を与えていたことが判明しつつある。

4. 東京工業大学における戦後改革と「大学基準協会」立ち上げへの影響

東工大は敗戦直後の1945年9月28日に和田小六学長の指示のもと、全学の教授助教授を集めた「教授助教授懇談会」を開き、大学改革に着手した。改革案の立案は「東京工業大学教学刷新調査委員会」（以下刷新委員会）によって行われ、5ヶ月後の1946年2月1日「東京工業大学刷新要綱」（以下刷新要綱）が発表された。改革後の新カリキュラムでは学生は特定の学科に所属することなく、専門分野をコースとして選択履修した。1946年3月には助教授も参加できる全学教授会「教授総会」が発足し、学科別に配置されていた教官

は、1947年5月に学内措置の組織「仮設講座」に配置された。以上のような東工大の改革の具体的経過を知るには、沿革史『東京工業大学百年史』を用いるしかなかった。ところが、刷新委員会に参加した稲村耕雄（当時無機化学教室助教授）による詳細な議事録メモが、東工大百年記念館で発見された。そこで、議事録メモの解読作業を通じた改革過程の実証的な研究が、筆者を含む若手研究者によって進められている。

ところで和田小六は、1946年10月に文部省の「大学設立基準設定に関する協議会」（以下協議会）に出席し、教育に関する事項を担当する「第二小委員会」委員長に選ばれる。この協議会は「大学設置基準要綱」（以下基準要綱）を検討し、1947年7月「大学基準協会」として発足した。そして和田は、基準協会初代会長となった。以上のような経緯から、和田は「戦後大学改革」における最重要人物として、大学史研究者に以前から注目されてきた。そこで筆者は、稲村が残した議事録メモと、大学基準協会発足に関わる資料を比較検討し、東工大の改革が「戦後大学改革」とりわけ大学基準協会立ち上げにおいて、和田個人の貢献だけにとどまらず、その内容や人的側面からも影響を与えていたことを明らかにした。

「基準要綱」第1条に「大学はその設立の目的・使命を明示すること」と表した際、和田は「小委員会の目的と異なるが順序として掲げた」と説明している。これは東工大で「刷新要綱」を立案する過程で、教育方針の検討から始めた経験が生かされている。「基準要綱」で「大学長は教授の任用に当たっては教授会に、助教授の場合には教授助教授に諮る」ことを求める第10条は、東工大の「教授総会」での教員選考規程と一致する。そして「基準要綱」を最初に作成し、詳細は分科会で詰める会議の運営方法は、東工大での会議運営方法と一致する。「基準要綱」では講座制が再検討されたが、この再検討の議論と同時平行するように、東工大でも「仮設講座」設置の過程で、講座制の功罪が議論された。「大学設立基準設定に関する協議会」工学部会の議論に目を向けると、カリキュラムは、「行政区分の学科（Department）」ではなく学生が「履修しうる履修課程（Course of study）」別で定めるとあり、東工大で1946年に導入したコース制カリキュラムの理念が生かされたものになっている。人的側面では大学の学長・総長級の人物が大学基準案を検討する「基準委員会」委員に、東工大「教授」の池原止戈夫が参加し、さらに、東工大の事務局長・事務職員も、日本大学に基準協会事務局が設置されるまで、東工大に設置された仮事務局の活動に参加していた。先行研究の中には、大学基準協会設立過程での占領軍の指導的役割を強調するものもあるが、大学基準協会発足過程において東工大での改革の経験が果たした役割も、

同時に評価すべきであると、筆者は考える。

おわりに

以上のように、「戦後大学改革」の歴史において、東大は教育刷新委員会や米国教育使節団に、東工大は大学基準協会にそれぞれ影響を与えてきたことが、各大学の所蔵資料から明らかになった。いわば近年の個別大学における歴史資料の集積が、その大学の歴史研究のみならず、日本全体の「戦後大学改革」史研究へも貢献することを可能にしたのである。今後も全国の大学アーカイブがますます発展し、その発展が大学史研究に一層大きな支えとなってくれることを、筆者は大学史研究に関わる多くの先輩とともに願ってやまない。（ことわりのない限り本文中の人名の敬称は略してある）

参考文献

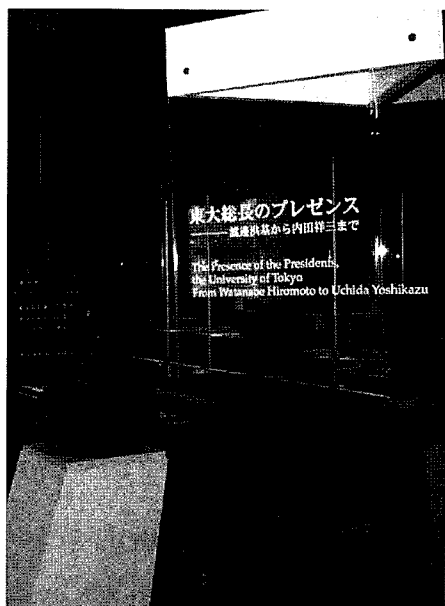
- ・羽田貴史『戦後大学改革』玉川大学出版部、1999
- ・大崎仁『大学改革1945～1999』有斐閣、1999
- ・中山茂「展望：大学史—科学史の背景としての—」『科学史研究』第Ⅱ期、10号、1971
- ・寺崎昌男『プロムナード東京大学史』東京大学出版会、1992
- ・寺崎昌男編「東京大学 教育制度研究委員会記録」『東京大学史紀要』第7号、1987
- ・「東京工業大学刷新要綱」『七十周年を迎えて』東京工業大学、1951
- ・東京工業大学『東京工業大学百年史』通史、1985
- ・大学基準協会所蔵『大学基準協会十年史資料（大学設立基準設定協議会関係資料）』
- ・田中征男『戦後大学改革と大学基準協会の形成』JUAA選書第2巻、1995

東京工業大学の議事録メモを用いた研究として、以下の論文を挙げておく。

- ・杉谷裕美子「戦後東京大学改革過程における教養教育の成立—その背景と条件」『大学教育学会誌』21巻1号、1999
- ・岡田大士「東京工業大学における第二次大戦直後の大学改革—『東京工業大学刷新要綱』成立過程とその評価」『科学史研究』第40巻（No.217）、2001
- ・鳥居朋子「戦後教育改革期における東京工業大学のアドミニストレーション—『系』を基礎とする自律的な組織運営に着目して—」『名古屋高等教育研究』第3号、2003
- ・岡田大士「東京工業大学における『戦後大学改革』—その過程と大学基準協会発足における役割」『大学史研究』第20号、2004

（東京工業大学大学院）

「東大総長のプレゼンス 渡邊洪基から内田祥三まで」が開催されました。



ホームページでお知らせしたように、東京大学総合研究博物館旧館展示ホールにおいて、2004年4月29日から8月29日を会期として、「東大総長のプレゼンス 渡邊洪基から内田祥三まで」が行われました。

東京大学史料室では、総合研究博物館と共同してこの展示に携わり、史料室所蔵の総長関連史料の中から数点を提供するとともに、各総長の経歴に関する考証作業を担当しました。

本展は、国立大学から大学法人へという一つの転換点に立つ現在の東京大学において、「東大総長という存在」の持つ意味を、歴史的な文脈上で再考する機会となることを企図して試みられたものです。

期間中を通じて、歴代総長の関係者を初め、多数の方々のご来臨を得ました。

展示品一覧

- (1) 昭和戦前期の東京帝国大学風景：ビデオフィルム（1940. 医薬卒. 谷武治郎）史料室蔵
- (2) 加藤弘之彫刻像（1915）朝倉文夫作
- (3) 松井直吉彫刻像（1914）新海竹太郎作 農学部蔵
- (4) 長與又郎彫刻像 2（1934）日名子実三作 医科学研究所蔵
- (5) 長與又郎彫刻像（1937）日名子実三作 医学部蔵
- (6) 山川健次郎肖像画 川村清雄作 理学部蔵
- (7) 山川健次郎肖像画 安宅安五郎作 武蔵学園蔵
- (8) 山川健次郎レリーフ 2（1931）日名子実三作 武蔵学園蔵
- (9) 古在由直彫刻像（1927）高田博厚作 福井市美術館蔵
- (10) 小野塚喜平次文庫（洋書） 法学部図書館蔵
- (11) 図書館部品 総合図書館蔵
- (12) 図書館竣工記念品 総合研究博物館蔵
- (13) 震災復興ガラス乾板原板：内田祥三資料 総合研究博物館蔵
- (14) 渡邊洪基肖像画 史料室蔵
- (15) 帝大大講堂と刻印の呼鈴 史料室蔵
- (16) 大学公印 2（1897～1947使用）史料室蔵
- (17) 恩賜の銀時計（1913. 工卒. 阿久津国造）史料室蔵
- (18) 英戦艦ネルソン級35000トン戦艦図（1925）：平賀譲資料 史料室蔵
- (19) 湯川秀樹から平賀謙一宛ての平賀譲追悼書簡：平賀譲資料 史料室蔵
- (20) 外山正一から大隈重信総理宛ての著書謹呈書簡：外山正一資料 総合図書館蔵
- (21) 外山正一の日記類：外山正一資料 総合図書館蔵
- (22) 渡邊洪基の日記類：渡邊洪基資料 史料室蔵
- (23) 加藤弘之の日記類：加藤弘之資料 史料室蔵

東京大学史史料室日誌（平成16年2月～9月）

- | | |
|--|---|
| 2月9日（月）第58回東京大学資料の保存に関する委員会 | 「東京大学史史料室規則」「東京大学史料の保存に関する委員会規則」改正案を各委員に送付 |
| 2月23日（月）室員打ち合わせ | |
| 3月1日（月）「東大総長のプレゼンス」展示準備のため閲覧停止 | 6月9日（水）広報委員会より平成16年版『東京大学の概要』原稿作成依頼受ける |
| 3月4日（木）東洋大学井上円了記念学術センター見学（谷本、小川、八木） | 6月10日（木）谷本室員、大学史資料協議会出席 |
| 3月8日（月）谷本室員、大学史資料協議会出席 | 6月18日（金）日本歴史学会より『日本歴史』掲載記事（史料室紹介）執筆依頼受ける |
| 3月12日（金）～3月13日（土）
谷本室員、1880年代研究会出席 | 6月23日（水）九州工業大学図書館事務長ほか来室、大学史編纂に関する相談受ける |
| 3月15日（月）「東大総長のプレゼンス」展示準備作業（その後4月1日、4月5日、4月12日、4月13日、4月15日、4月16日、4月20日、4月23日、4月26日） | 6月25日（金）畑野室員、平賀文書整理に関する打ち合わせのため内藤初穂氏宅訪問 |
| 3月27日（土）谷本室員、謙堂文庫にて中野実氏の大学史研究に関する報告 | 7月9日（金）第59回東京大学資料の保存に関する委員会 |
| 4月2日（金）追分寮廃寮に伴い、同寮生組織から「寮生大会議事録」等寄贈受ける | 8月23日（火）平成16年版『東京大学の概要』沿革史部分ほか原稿入稿 |
| 4月27日（火）「東大総長のプレゼンス」内覧会 | 8月28日（土）谷本室員、1880年代教育史研究会出席 |
| 5月6日（木）閲覧再開 | 8月31日（火）今泉朝雄教務補佐員退職 |
| 5月19日（水）谷本室員、大学史資料協議会出席 | 9月1日（水）瀬川大教務補佐員採用 |
| 5月20日（木）～5月24日（月）
看護学校資料（平成14年3月受入）公開方法について、医学部図書館、医学部教務係、附属病院教育研修係と再確認 | 9月7日（火）平賀文書の整理に関する打ち合わせ（工学部大和教授、谷本、畑野） |
| 5月22日（土）～5月23日（日）
谷本室員、全国地方教育史学会第27回大会出席 | 9月9日（木）「東大総長のプレゼンス」展示資料返却受ける |
| 5月26日（水）教養学部美術博物館にて一高に関する資料整理作業見学（谷本、小川） | 9月16日（木）『東京大学史紀要』第22号送付終了、大塚敬子氏より「昭和17年入学宣誓式宣誓文」寄贈受ける |
| | 9月17日（金）向ヶ岡学寮廃寮に伴い、同寮生組織から「寮委員会議事録」等寄贈受ける |
| | 9月27日（月）事務補佐員業務引継作業 |
| | 9月30日（木）八木晴花事務補佐員退職 |

題字 森 巨元総長

東京大学史史料室ニュース 第33号

発行日：2004年11月30日（年2回発行）

編集・発行：東京大学史史料室

東京都文京区本郷7-3-1

電話：03（5841）2077（直）

印刷所：株式会社 芳文社

東京都町田市1-18-18

Archives Section of the University of Tokyo